

第56回学生生活実態調査(北海道版)完成

～コロナ禍で大学生生活に影響・収入減・孤立感・『バイトが出来ない、友人ができない』～

全国大学生協連合会北海道ブロックでは昨年10月におこなった道内の大学生1,000名を対象にした学生生活実態調査がまとめられ、4月7日(水)に道政記者クラブにて報告会を開催しました。学生の困窮生活には各メディアも関心が強く、多くの報道関係者(メディア: HBC/STV/UHB/TVH/HTV・新聞社: 道新/毎日/読売の計8社)の参加となりました。アンケートによると、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、道内で実家を離れて暮らす大学生のアルバイト平均月収は2万6370円で、前年より2割以上(6710円)減り、アルバイト先の営業時間短縮などが影響し、収入が大きく減少している事がわかったほか、アルバイトをしている割合が15.9%減少し、首都圏と比較してもコロナ禍による求人減や雇用打ち切りが道内では深刻化している事がわかりました。また食費が14%減少するなど生活が厳しくなっていること、去年入学した学生のうち、大学生生活が充実していると答えた割合は過去最低



北海道庁道政記者クラブでの報告会の様子

の56.9%。「友だちができない」など対人関係に悩む人も34.8%いることがわかり、孤立感を深める学生も増えていることなどから、大学生協の須田常務理事より「学生同士が支え合うコミュニティづくりなどできないか考えていく」と今後の学生支援への課題の他、『ほっかいどう若者応援プロジェクト』第2弾企画の予定などが報告されました。

道産米消費拡大運動による『子ども』『学生』への道産米の寄贈を!



2021年4月9日(金)に食・みどり・水を守る道民の会様よりコロナ禍で余剰が生じている道産米の消費拡大と食糧安全保障の啓発などから、コロナ禍の中で困窮する子どもや学生に対して、お米をもっと食べてほしいということで、こども食堂北海道ネットワークと北海道生協連へ、道産米(3,130kg)の寄贈式が行われ

ました。寄贈していただいたお米は、『こども食堂北海道ネットワーク』を通じ、全道のこども食堂へ、北海道生協連に寄贈されたお米は、『大学生協事業連合北海道地区』へお渡しし、大学生協食堂で、学生に『食の支援企画』として活用して頂きます。



大学生協 コロナ禍でも「伝える」を諦めない。 新入生の不安にこたえる「オンライン説明会」の実施

全道・全国の大学生協は「新入生・保護者の不安や疑問にこたえる」を合言葉に、新入生の大学生活スタートをお手伝いする「新学期活動」を旺盛に行なっています。その核となるのが、対面による不安解消の機会です。

多くの大学生協がキャンパス内の食堂ホールや教室を使い、新入生・保護者を招いて「入学準備説明会」を開催します。先輩学生の体験談を通して、入学式に着るスーツやノートPCなど、入学前に準備したほうが良いことの提案、教科書購入や履修登録など、入学直後にやることの紹介、生協店舗の使い方や部活・サークル紹介など、大学生活を豊かに過ごす方法を伝え、生協加入やその後の生協利用につなげています。

また、学生組織委員会を中心に、入学式前後に友達作り企画を行なっています。新入生同士のつながりや先輩とのつながり、サークル紹介など、人と人との出会いを作るきっかけとして、こちらも豊かな大学生活のスタートを支える活動となっています。

2020年3月以降、コロナ禍により大学入構が制限され、入学準備説明会や友達作り企画も中止を余儀なくされました。4月以降もオンライン講義が主となり、キャンパスから学生の姿が消えました。購買・食堂を中心に利用が激減し、生協事業への打撃も大きいものでしたが、その後の調査で明らかになったのは、「課題に忙殺される」「アルバイトを解雇された」「友達ができない」「想像していた大学生活と違う」といった大学生、特に1年生の切実な悩みでした。

コロナ禍で大学生活はどう変わるのか、その中で、どんな準備をするべきか。入構制限・三密回避の中、この



ことを伝えるために取った方法が「オンライン説明会」でした。学内の中継や先輩の大学生活の様子、オンライン講義の受講方法など、様々な情報を通し、「大学生協はみなさんの大学生活をサポートします！」と伝えました。各生協の取り組みを共有することで、「直接会えなくても、伝えられる」ことが確信となり、多くの生協でオンライン説明会の実施につながりました。また3月末からは学生組織委員会を中心に、オンラインでの友達作り企画が旺盛に行われています。一方で「本当に伝えたいことは伝わったのか?」「もっと多くの人に知ってもらう方法はないか?」など、課題も明らかになりました。

コロナ禍で社会も大学生活も大きく変わりましたが、「大学生がいる」という事実は変わりませんが、これから大学生の役に立つ存在であるために、何ができるのかを考え、動き、実現することが、より広い共感につながるのだ、と改めて実感した2021年春でした。

AIRDOは「子ども食堂」の活動を応援しています 「北海道の翼」として いまできることを これからも地域の皆様にお届けします。(機内紙転載)



こども食堂北海道ネットワーク・松本克博事務局長(中央)へ寄贈する様子

AIRDOからは〈こども食堂北海道ネットワーク〉を通じて、北海道内の「子ども食堂」に機内サービス商品が寄贈されました。「子ども食堂」は地域における食を通じた子どもたちの居場所のひとつとして全国各地で開設されており、コロナ禍で活動の制約を受けながらも、関係の皆様による支援活動が続けられています。

今回の取り組みでは、「空の旅」「地元の魅力」をお届けすべく、機内ドリンクサービスでご提供しているオニオンスープの製造元・グリーンズ北見様、ブレンドコーヒーの製造元・珈房サッポロ珈琲館様と共同で贈呈されました。

AIRDOではこれまでに、医療関係者の方々への機内食の寄贈、空港で使用する消毒用アルコールにおける地元企業様との連携、北海道応援メッセージの募集・発信といった取り組みを行っているとのことです。

「子ども食堂」への支援活動は、SDGsの目標3(すべての人に健康と福祉を)と17(パートナーシップで目標達成)につながる活動であり、「北海道の翼」として、これからも地域社会と連携した取り組みを行ってまいりますと話されていました。



寄贈商品